

補完代替医療を実践する医師の世界観に関する質的研究

Qualitative Research in the View of Medical Doctors
using Complementary and Alternative Medicine

谷口 礼 (Yuki Taniguchi) 指導：辻内 琢也

序章

近代西洋医学の限界と批判とともに、補完代替医療を臨床で実践する医師が増加している。そこで本研究では、現在臨床で補完代替医療を実践する近代西洋医療の医師の医療の世界観を明らかにする。

第1章 先行研究と本研究の位置づけ

日本における保管代替医療は、一般市民の利用率増と共に注目され、医師も実践するようになっていく。医師は近代西洋医学の世界観を獲得して臨床に出るものの、病気・健康・死など様々な概念については、文化的・社会的な背景から大きな影響を受けることが知られている。

第2章 本研究の理論的枠組みと研究内容

理論的枠組みとして、Kleinman (1980) が提唱した、健康希求行動の基盤であるヘルス・ケア・システム、専門職の捉える「疾病 (disease)」、患者の捉える「病い (illness)」という概念を用いて第4章以降の考察を行う。

調査は、補完代替医療を実践する6名の医師に自由会話方式の直接インタビューを行った。調査内容は対象者の許可を取って録音し、調査ノートと同時に作成した。対象者は補完代替医療を臨床で用いていることを前提とした。調査時間は平均1時間半で、調査内容は逐語文字化し、後にシーケンス分析を行った。

第3章 調査対象者のライフストーリー

本章では第4章の基礎として調査対象者のライフストーリーを記した。

第4章 医療をめぐる世界観

身体観、説明モデルは、補完代替医療を生物医学に翻訳している例、別々に扱っている例、複数の医療の世界観を

融合している例がみられた。また、多くの説明モデルを持つことで患者の病気に対する信念や意識を多様に捉え、社会的制約の範囲内で患者の信念に適した治療法を選出していることが明らかになった。補完代替医療を行う際に、医師には自己不確実感があり、時代や日々の臨床によって解消される例、自身の内に秘めたまま生涯抱える葛藤となる例が見出された。また、複数の医療を同時に行う調査対象者全員の傾向として、いかなる治療法も患者の病いの現実に対応する「ツール」、患者を知る「方法論」だと考えていることが明らかになった。医師は、文化、社会、自然環境をも含んだ世界観を有している。医療観の拡大とともに患者は医師自身の課題もたらし存在だと認識され、医師—患者関係は相互作用であると考えていることが明らかになった。調査対象者である医師から医療を通して「いのち」の本質を追究する姿勢が明らかになった。

終章

医師は補完代替医療を実践する過程で民俗セクターの世界観を吸収している。その状況を医師における医療の世界観として図示した。横軸に生物医学—反生物医学への指向性を表した。医師の哲学的探求である「方法論」を内向性、患者に向かうベクトルをもつ「ツール」を外向性とし、縦軸として内向性—外向性の指向性を表した。生物医学的および外向性を示す第2象限から、反生物医学的および内向性を示す第4象限に集中していた。それは医師の人生における探求の現れであり、どの位置が最良であるかを示すものではない。

医師は、臨床の中で葛藤や限界を覚えながら様々な補完代替医療を実践していく過程で「いのちの本質への追及を行い、「人と人の関係性」、「自然と人の関係性」、「生活と人の関係性」の回復を行う役割を担っている。